

## 消されたエリナの賃金

—ハリエット・ピーチャー・ストウとローラ・タウンにみる黒人女性の家内賃金労働をめぐって—

増 田 久美子

### I

アメリカ南北戦争期、サウスカロライナ州シー諸島地域における「ポートロイヤルの実験」<sup>1</sup>にかかわり、教師としてシー諸島のひとつであるセントヘレナ島に派遣されたローラ・タウン（Laura Matilda Towne, 1825-1901）は、戦後も同島にとどまり、20年以上にわたって日々の生活を日記に書き綴った。戦争の勃発からおおよそ1年後、「1862年4月28日」と日付されたタウンの日記は次のような記述によって始まる。

〔黒人女性の〕エリナを自分の小間使いとして雇った。食事の給仕をし、洗濯もしてくれる。いま週給として50セントを渡しているが、彼女が〔他職によって〕じゅうぶんに労賃を受けていなければ、賃金を上げるつもり。

黒人たちが〔政府監督官の〕ピアス氏に、綿花ではなくトウモロコシを植えて育てたいと乞うところを耳にすると、同情を禁じえない。彼らは綿花に有用性を見いだせず、トウモロコシこそが自分たちを飢餓から救ってくれる作物であることを知っており、来年の収穫物に気をもんでいる。〔…〕彼らにとって白人女性が身近にいることは、ほかの何よりもまさる安心感を与えているようだ。彼らは白人女性がいないと「困る」から、一緒にいてくれと嘆願する<sup>2</sup>。

ニューヨーク港を出航した日から1か月を経ずして<sup>3</sup>、タウンは本土と切り離されたシー諸島地域の現状を鋭く観察し、この地の解放民たちが何を望んでいるかを把握した。彼女の眼がとらえたのは、労働への賃金支払いと食用作物の栽培、そして白人女性のプレゼンスという3つの必要性である。

たしかに解放民にとって、かつて農園主のもとで従事していた綿花栽培は奴隷制の延長にほかならなかった。彼らが熱望していたのは収穫後に売り払われてしまう商品作物ではなく、日々の生活をつなぐ食用作物の栽培であった。また、北部から来訪する白人女性は、北軍兵士らによる「現地徴募」の被害から身を守ってくれる

ばかりか、「黒人種に文明化と教育をもたらす導き手」とみなされていたことから、タウンは白人女性の存在が解放民たちの「安心感」に寄与している事実も自覚していたと思われる (April 24, 1862, PSP)<sup>4</sup>。では、「賃金」についてはどうなのか。北部連邦軍による奴隷解放後、とつじょ奴隷労働から市場原理の労働主体へと変貌させられたばかりの黒人たちにたいして、賃金を介した労働、すなわち「自由労働」はどのような影響を与えたのだろうか。

興味深いことに、黒人女性エリナの賃金労働を記述した冒頭部の数行は、1912年に『ローラ・タウンの書簡および日記』として出版されたとき、編者のルパート・サージェント・ホランドの手によって完全に削除されてしまっていた。もちろん、ある人物の日記を出版する過程において原文の削除や改変は不可避な編集作業であろう。「1862年4月28日」の最大の読みどころは、タウンら白人たちが「シャウト」という「野蛮で異教徒的な」黒人の集いを訪問した体験談にあるため、「エリナの賃金」は編者にとって日記上の余片にすぎなかったのかもしれない<sup>5</sup>。

だが、本稿においてはこの抹消された賃金への言及こそ、南北戦争期・再建期アメリカの「自由労働」というイデオロギーを「女性」および「ドメスティシティ」の視点から評定する機会として提起したい。人種の別なく個人に本質的な自由をもたらすとされた「自由労働」の思想は、奴隷制社会で「解放」されたはずの黒人に別のかたちで隷属状態を強要することになるが、その事態は中流階級の白人女性にとって、ドメスティシティ上の解消できないジレンマ——市場という経済領域から切り離された「聖域」であるはずの家庭に、家事全般に従事する「賃金労働者」を受け入れざるをえない現実——にあらたな解釈をもたらす契機にもなった。さらには、女性とドメスティシティの関係性に「人種」という視座を付加してハリエット・ビーチャー・ストウやローラ・タウンのテキストを検証するとき、両者はともに反奴隷制を首唱し、ともに南部での「ハウスキーパー」という役割を経験した北部出身の女性知識人でありつつも、黒人女性と賃金労働にかかわるふたりの態度は鮮明な対照をなしている。19世紀後半のアメリカの自由労働イデオロギーが、はたして「女性の領域」を規制するドメスティック・イデオロギーというもうひとつの中流階級思想とどのようにかかわっていたのか。本稿はそのような問題点を考察するにあたり、ふたりの北部人女性によって示された、自由労働にたいする受容と懐疑の二面性を中心に取り組むものとする。

## II

19世紀のアメリカ社会における「自由労働」とは、具体的に何をさしたものであるのか。この社会言説のイデオロギー性を女性とドメスティシティとの関係から再検討するには、まず自由労働にかんする問題の所在を確認しておく必要がある。

独立革命期に掲揚された共和制理念には、非隷属的な労働に従事する自立した個人を基盤とした国家構想が存する。これはアメリカの共和制を維持するための重要な局面として、「労働の尊厳」にたいする無条件の信奉を謳うものであり、その「自立した個人」の理想像は、「ヨーマン」(yeoman)という独立自営農民、すなわち「自前の耕作地を所有する自給自足的な農業労働者」に求められた。やがて、ヨーマンに見いだされた「自立性」や「勤勉さ」等の徳性は最初期の共和国市民像として堅固に理念化され、市場経済化した社会においても個人が実践すべき本来的な労働倫理として継承されたが、労働に双務的な「契約」という法的平等が介入するようになると、「自立性」は「個別に契約可能な労働主体」となり、「勤勉さ」は「労働への自発的な従事」と翻意された「自由労働」の思想へと結実していく。こうして自由労働は、とくに産業化の進んだ19世紀北部社会において支配的な経済活動上の思想として普遍化していった<sup>6</sup>。

ことにアンテベラム期において、「自由労働」の思想はエイブラハム・リンカーンを筆頭とする草創期の共和黨員に共有された北部社会の基本理念のひとつであり、「自由労働」に「奴隷労働」を対峙させることで奴隷解放思想の支柱にもなった<sup>7</sup>。しかし、これを奴隷解放の装具として利用することにより凶らずも露呈したのは、「自由労働」の思想が社会の看過できない矛盾や曖昧さを抑圧したうえで独歩するイデオロギーという事実であった。

「自由労働」と「奴隷労働」の単純な二項化に隠れてしまうのは、「自由な労働主体とは何者か」という問題である。共和国形成期において、その主体は生産手段を自有する小生産者(もっとも理想的な労働者とされたヨーマンのほか、都市部の熟練職人などの「生産的階層」)のことであり、とりわけ熟練職人は「生産技術の誇りと経済的自立を成した平等市民」という特権者として、「不自由労働者」である被雇用者(徒弟や使用人などの賃金労働者)とは別格との自負があった。だが19世紀をつうじて、いわゆる北部での「市場革命」の進展と資本主義の浸透が顕著になると、家庭が生産の場として機能しなくなり、ほどなくして多くの男性が賃金労働者へ「変貌」を遂げたため、かれらを従来の賃金労働者のような「不自由労働者」と分類することは不可能になった<sup>8</sup>。こうして、賃金労働を「労働の尊厳」の軽視とみなした

18世紀的な労働観は、19世紀の産業化によって建国期における独立小生産者の労働倫理を理想として残しつつも退行する。賃金労働者は、市場経済のなかで雇用者と労働契約を結ぶ「自由」が確保されている点において——あからさまに言えば、契約の自由なき奴隷身分ではないという否定論的な観点において——自由労働の担い手であると捉えられ、それは南部の奴隷労働批判にも一定の論拠を与えるようになる。アンテベラム期以降の自由労働の概念は、奴隷労働の非生産性や経済効率の低さの批判という功利主義的側面を摂取し、その正当性を強化していく一方で、南部の奴隷制支持者らは北部の賃金労働による搾取のあり方を「賃金奴隷」と痛罵し、奴隷主によって保護された奴隷生産の営為のほうがすぐれていると反駁した<sup>9</sup>。このような南北間の応酬は、「自由労働」への根源的な問いを投げかけることになった。はたして「自由労働」者とは本当に自由な労働者なのだろうか——別言すれば、自由労働の自由とは具体的に何を指示しているのだろうか、と。

表面的には「契約」という一元的な法的効力が労働者の自立や平等を保証すると考えられてきたために、現実の労使関係にみられる不平等性や片務的労働強要の問題が長らく考慮のそとに置かれていた点も、「自由労働」イデオロギーの特徴のひとつだった。自らの労働力を市場において自由に賃金と交換する仕組みは、自由労働の基本概念を楽観的に解説してしまう。それゆえに、そのような思想が支配的な社会秩序では、名目上「野心ある」労働者であれば誰でも生産手段と経済的自立が獲得できるばかりか、やがては私財と品位を有する中流階級層への向上を目指すことも可能とされた<sup>10</sup>。このような自己牽引型の労働原理を重視する奴隷制廃止論者にとって、自由労働という不自由、すなわち、無期限の自由労働という労働形態しか選択の余地がないような事実上の強制労働は、解放奴隷に供すべき「自由」とけっして矛盾することなく推進されていく。このような労働のあり方が南部社会に導入されれば——フレデリック・ダグラスという実例が彼自身の著作をつうじて語られているように——黒人たちは「隷属」から脱却し、「自由」という社会的地位を獲得できるだろうと信じられたのである<sup>11</sup>。

しかしながら、黒人奴隷が解放されて賃金労働者となれば、彼らの自立と自由が達成されうるという構想は、実際にはきわめてユートピア的であったといわざるをえない。黒人たちを自由な労働者に仕立てるべく、奴隷解放後の南部において自由労働イデオロギーが持ち込まれても、そもそも奴隷労働に立脚した経済的基盤をもつ社会においてその実践は非現実的であった。というのは、かつての奴隷主に代わって新たな白人農園主との間に労働契約を結んだ解放民にとって、自由労働とは労働

使間にパターンリズム的關係を再構築させるものにほかならず、賃金を支払われる以外は奴隷制そのものといってよい内実をはらんでいたのである<sup>12</sup>。このことは、ボストン出身の技師で実業家であったエドワード・フィルブリックが、セントヘレナ島にて自ら「自由労働の実験」<sup>13</sup>と銘打ったプランテーション経営の実践をみればよく理解できよう。彼が概念化する自由労働とは、端的にいえば、自由労働者としての黒人労働のほうが奴隷制下での強制労働よりも少ない投資で効率よく作物を生産できるという点につきる。フィルブリックには「貧しいニグロを働かせて富をため込むエセ慈善家」との非難の声が絶えなかったように、彼の実践した自由労働はしばしば奴隷労働と比較された<sup>14</sup>。それでも彼の揺るぎない自由労働への信認は、「400万人の黒肌<sup>デーキー</sup>ら」が勤労という白人中流階級的な素養を身につけ、高い労働意欲をもって綿花栽培に取り組めば、生産効率は飛躍的に向上するという信念と同根であった<sup>15</sup>。

綿花の植えつけ高は、つねに〔黒人たちの〕勤勉の実態を示すじつに確かな指標でありますし、その勤勉の度合いは、彼らの進歩・向上を計るうえでつねに最高の尺度でありましょう。〔…〕あなたは彼らが尋常ならざるほどに依存的とおっしゃいますが、それについてわたしは賛成いたしかねます。この地上すべてを見渡して彼らと同様の文明度にいる人びとを比べてみても、彼らほど自立した人間はほかにいないでしょう（傍点原文）<sup>16</sup>。

フィルブリックにとって綿花栽培と直結する勤労の精神は、黒人の「依存的」性質の克服をへて「自立」の達成に資するという、典型的な中流階級的・ヨーマン的価値観の再是認であった。しかしながら、黒人労働者に土地の獲得を許可せず低賃金の長時間就労を強いる「自由労働」のあり方は、同じセントヘレナ島に在住していたローラ・タウン——彼女はつねにフィルブリックにたいして疑念的であった——にとって「黒人たちにのしかかる暴君の権力」にしか映らなかった（May 19, 1862, PSP）。タウンの日記からも見てとれるように、自由労働と奴隷労働の相似という事実はすでに露見していたのである。

### III

すでに確認したとおり、アンテベラム期における「自由労働」の思想は、あらゆる賃金労働者をその実践主体として取り込みながら、強力なイデオロギーとして北

部の中流階級的価値観を温存した。やがて「自由労働」が南北戦争期および再建期の南部で理想的な労働形態として導入されると、自由労働の「不自由」は労働問題の争点となっていった。だが、なおも各方面から自由労働の「自由」が提唱され続けたのは、労働力の提供と報酬の双務性を保証する幻想的な力点、すなわち「契約」という法的儀礼への盲目的ともいえる追従によるところが大きい。

19世紀アメリカ社会における契約の成立とは、「自由という抽象的権利」の具現であった。自由労働イデオロギーを信仰する者や、奴隷身分を脱し契約を自ら交わすことが可能となった黒人労働者にとって、契約とはそれ自体の法的パラダイムでの位置づけを超越し、まさに「自由」であることの指標となっていた<sup>17</sup>。そうであるならば、ドメスティック・イデオロギーに被覆された19世紀の女性中流階級文化のなかで、契約を介する一切の行為から切り離されていた（はずの）白人女性にとって、「自由労働」は直接関与することのない問題であった。都市部の白人女性たち、とりわけ既婚女性は一度結婚という契約を結んでしまうと、それ以降の契約行為は慣習により（表面上は）禁じられていた。彼女たちは家庭の主婦として、ドメスティックな空間である家庭を外来の「異質なるもの」から保護するというイデオロギー上の役割を担うことが期待されていたため、「聖域」とも「避難所」とも呼称された中流階級家庭は、あらゆる市場的価値観から隔絶されていると考えられていたのである<sup>18</sup>。

だが家庭の領域に賃金労働が侵入することは、当然のことながら、ありふれた現実であった。そのもっとも顕著な例は家事使用人が従事した中流階級家庭内での賃金労働である。これはブルジョア的家庭の形成とその秩序・体面の維持に不可欠なものとして、19世紀の女性たちが関わった最大の雇用形態だった。ところが、当時の雇用者（女主人）と使用人（女性労働者）の二者は、労働契約や労使間慣行にもとづく労務関係よりも「道徳観と規律」が先行する指導関係として捉えられ、自由労働という概念の干渉によって女性と賃金労働を結びつけることは巧妙に忌避されてしまっていた。なぜなら、賃金労働は女性労働者に経済的および精神的自立をもたらし、ドメスティックな領域である家庭からの「解放」の機会となりえ、女性自らが労働契約を結ぶという自由と市民性の権利を附与する危険性をともなっていたからである<sup>19</sup>。

では、女性の賃金労働が否定されつつ、実質的には家事の切り盛りに使用人が必要になってしまうという中流階級家庭の場に生じる矛盾について、19世紀の家庭礼讃者たちは、それをどのように解消していたのだろうか。『アンクルトムの小屋』

(1852)を著し、当時ドメスティシティにかんする斯界の論客でもあったハリエット・ビーチャー・ストウを取り上げてみたい。

まず『アンクルトムの小屋』における家庭空間と奴隷制の関係性について、読者が共有する認識を確認してみると、ストウにとって奴隷制とは奴隷それ自体が商品であり、その売買によって家族構成に不安定や無秩序が生ずるという点で、家庭生活の安定性が脅かされるシステムであった。そのような市場原理にある奴隷制は「ドメスティシティにたいする市場的脅威」であるため、<sup>ドメスティック</sup>国家空間から奴隷制を撤廃すれば、<sup>ドメスティック</sup>家庭空間からその市場的価値観を排除することに結びつく。ゆえに、ストウは奴隷制批判を展開し、また、家庭内に侵入する市場性は一切否定されるべきという反資本主義的な立場を護持したと捉えることができる<sup>20</sup>。

しかし、ストウがそのように解釈されてきたのにたいしてレイチェル・クラインやマイケル・ピアソンは、ストウが同時代における多くの奴隷制廃止論者らと同様、じつに熱烈な自由労働イデオロギーの信奉者でもあったと指摘する。ストウにとって黒人奴隷ダイナの無秩序な台所は奴隷制そのものがもたらした結果というよりも、むしろ「労使関係と結びつく合理性および自己鍛錬」の不在によるものであるから、家庭内に北部的価値観である秩序や規律がもたらされるには、家庭内の賃金労働は是認される対象だったという<sup>21</sup>。

たしかに、南北戦争後の著作を通してストウが「家庭管理」と「家事労働問題」に専心している点に着目してみると、「家庭管理者」としての女性の専門をまっとうするためには家内賃金労働が不可欠であることが強調されている。ストウは「家庭内商業主義」を批判するどころか、逆に家庭内の賃金労働を惜しみなく称讃しているのである。たとえば、その雇用の必要性はキャサリン・ビーチャーとの共著『アメリカ女性の家庭』(1869)の序論にて高らかに宣言されている。

本書の目的は、家庭の運営という多くの困難かつ不可侵なる職務を支える、あらゆる雇用についての敬意および報酬を高揚することにある。また、女性の真なる職業すべてが、もっとも荣誉ある男性の職業と同様に囑望され、敬意を払われるようにすることである<sup>22</sup>。

ビーチャー姉妹のいう「女性の真なる職業」とは、具体的には「多感な子ども時代の心を育み、家事使用人の教育と監督をして家庭と家政を管理すること」を意味し、家庭におけるこれらの女性の「義務」は、男性の仕事と同等の「神聖かつ重要」な「訓練されるべき職業」と定義されている(14-15)。「専門の主婦」の地位向上が

目指されるとともに、ストウは他の著作においても、主婦や家庭を支える「あらゆる雇用」について、家事使用人という家内賃金労働が中流階級家庭に不可欠な存在であると熱心に提唱するようになる。

ただしストウは女性の賃金労働を支持するものの、女性が家庭外で労働をすることにたいしては、きわめて批判的であった。たとえば、「店や工場」で働く女性が病気を理由に欠勤したとすると、給金は差し引かれたまま生活費を賄っていかなければならないが、「大切な家事使用人」が病気の場合は「家族のひとりとして丁寧に看病され、家庭医に診てもらい、働かなかったからといって賃金の減給になることはない」という利点をあげて、ストウは家庭外労働の賃金および労働時間の非情さと家庭の女主人の恩情をわかりやすく対比させている。さらに、ストウは女性の身体的健康面から鑑みても、「座業による使役」であることの多い工場労働よりも「家庭での仕事のほうが報いられる」と提言する。

家事奉公はいつの時代においても、若い女性にとってこれ以上ない職業かつ領域として、身体的にも精神的にも、また、道徳的にも適している——そのため、女性はやがて幸福な妻となって幸福な家庭を築くことができるのである。しかし、工場労働や店内作業、そのたぐいのあらゆる雇用は、その本質からしてどうしても家庭的ならざるものである——これに従事してしまうと、ボーディングハウスでの生活を強いられ、また、穏やかな家庭の仕事とは限りなく異なる習慣を必然的に強いられるのだ（傍点原文）<sup>23</sup>。

キャサリン・ビーチャーは、女性教師の育成と普及を掲げて女性の地位向上を提訴するさい、それはあくまでも「家庭的な」女性の資質に依拠した職業として、その雇用は生涯にわたるものではなく良妻賢母になるための準備段階であるとし、教師という職業を「家庭の義務の延長」として定義することによって、女性の領域からの逸脱を否定した<sup>24</sup>。その戦略はストウも同様であったようだ。ストウは、家事労働がいずれは妻となる若い女性にとって「幸福な家庭」をつくるための教育の場にほかならないことを提起しながら、けっして女性が家庭という場を超えることない「道徳的」な職業として、女性と賃金労働（自由労働）を巧みに結びつける。男性賃金労働者ならば奨励される「自立」や「勤勉」といった徳性および労働契約の締結行為が女性の場合には充当しないという前提のうえに、ヴィクトリアニズム的道德規範を自由労働イデオロギーに接ぎ木するかたちで提示されているのである。い

わば「主婦の再生産」を確約することで女性が「女の賃金」という蔑称によって非難されずに、ドメスティックな価値観に裏打ちされた労働の「自由」を獲得する。ピーチャー姉妹のような論者たちが生み出したレトリックこそ、ドメスティック・イデオロギーと自由労働イデオロギーの結節点であるといえるだろう。

さて、ストウは家事使用人の教育もアメリカ人女性に課せられた重要な職務のひとつだと訴えたが、この行動的な女性作家が実際に奴隷解放後の黒人女性たちに家事労働をさせようとする試みは、いかに読むべきなのだろうか。フロリダでのプランテーション生活を綴った1873年出版の『棕櫚の葉』では、黒人女性への「家事のしつけ」は最終的に失敗に終わり、ストウが黒人教育の必要性を具申するというかたちで括られるのだが、ストウ家が南北戦争直後にオレンジ農園を購入したさいに<sup>25</sup>、彼女は「女性と自由労働」という主題に「黒人女性」がどのように関わるかという問題を無視することはしなかった。主婦たるストウは「未開なる家屋」に「文明化された暮らしの様式」をもたらそうと奮起し、解放奴隷のミンナという女性に家事を教え込もうとする。ミンナは「男物の衣類を繕うことは一応できるし、アイロンがけや料理も何とかこなすことができる」使用人であったが、食卓の「皿一枚さえ洗われず、掃除も何ひとつ手のつけられていない」状態のまま牛舎へ赴き、また、アイロンがけを途中で投げ出してしまうことがしばしば見受けられた。けっきょく、生まれながらの農園奴隷であったミンナは「男のように家事を忌み嫌っている」ことがわかり、中流階級的の資質を身につけるにいたる——『アンクルトムの小屋』におけるトプシーのような——将来有望な家内賃金労働者へと成長することはできず、ふたたび農場へと戻っていく（「あたしは農園生まれの農園育ち、それも生粋のさ。家事なんてやりたかないよ」）。その後、ストウはジャクソンヴィルから「訓練された家事使用人」として優秀な黒人女性を雇い入れるが、この「家事の大天才」はまもなく月給40ドルでホテルの料理人という家庭外賃金労働者として雇用され、ストウのもとをあっけなく去ってってしまうのだ。すると、優秀な使用人に「自己の代価を意のままにできる」自由な賃金労働力を認識したストウは、黒人女性にとって最優先すべきは「教育」であると断言することで、解放民女性への「家事のしつけ」の障害となっている現況へと議論を方向転換してしまう<sup>26</sup>。このようにして、かならずしも黒人女性は家庭内の賃労働者にならなくてもよいとする結論が導き出される。黒人女性の場合、自由労働イデオロギーがドメスティシティとの結束を絶対視しない点に、ストウは黒人女性と白人中流階級の女性とを画す一線を引いてしまうのである。

その点においてストウは、解放民女性を賃金労働者として自由労働の契約システムに縛りつける行為から回避しえたともいえるが、戦後も自由労働の原理に盲従し、賃金労働が法的平等によって支えられているという「労働の普遍的法則」から脱却できずにいた彼女のユートピア的理念は、クラインが指摘するように、その非難から免れうるものではない<sup>27</sup>。しかし、たとえストウには賃金労働に内在する自由労働イデオロギーの「不自由」が把握できなかつたとしても、その思想の「自由」をドメスティシティにつなぎ合わせ、男性と同じく（白人限定ではあるが）女性の「家事のプロフェッショナル」への報酬を肯定したことは留意すべきではないだろうか。さらに職業としての家事の専門化が実現すれば、女性が「幸福な家庭」づくりを目標としながらも、妻および母親という役割から解放されうるというまったく新しい可能性——ジェイン・アダムズのハルハウスにみられるような、「協同的家事労働システム」という先見的なヴィジョンの構築——さえ見いだせよう<sup>28</sup>。

ストウが依然として自由労働イデオロギーに執着している頃、ローラ・タウンは親友のエレン・マリーとともにセントヘレナ島で黒人教育機関ペンスクールを創設し、解放民の教育および学校運営に奔走していた。タウンはけっして自らの思想を体系的に表明する論者ではなく、その意味では19世紀に多く存在した「ダイアリスト日記を記す女性」のひとりだったにすぎない。だが、彼女の日記や書簡には、南部社会に移植されはじめた「自由労働」をめぐる現場の声が発せられている。ストウが自由労働とドメスティシティを連坐させてそのイデオロギーを戦後のエッセイに著述したとするならば、タウンは日々の生活環境において自由労働イデオロギーへの疑念を経験的に記録したといえる。そしてその日常の記録から、「自由労働」と「ドメスティシティ」と「黒人女性」をつなぐ結び目の抽出が期待しうるのである。

#### IV

戦後もセントヘレナ島にとどまり、南部再建時代をへて1901年に亡くなるまで同島の黒人たちと生活をともにしたローラ・タウンは、その生涯を解放民教育に献身した女性教育者である。とりわけタウンが創立したペンスクールは、まさに彼女を南部黒人教育の「開拓者」として刻印することになった偉業のひとつとして数えられ、のちに解放民職業訓練施設として設立されたハンプトン大学の付属校として併合されるまで、同校はアメリカにおける黒人教育を牽引する先駆的存在であった<sup>29</sup>。なるほど、タウンのような白人女性をシー諸島へと駆り立てた南北戦争期の状況を鑑みれば、ジャクリン・ジョーンズのいうように、解放民教育は北部の女性たち

にとって「家庭の外部にある、いまだ手つかずの豊富な労働資源」であった<sup>30</sup>。だが、ここで検証したいのは女性教師ローラ・タウンというよりも、むしろ期せずして南部プランテーションの「ハウスキーパー」という役割に投げ込まれた北部人女性が、自由労働イデオロギーの導入によって賃金労働者となった黒人女性の姿をどのように捉えたのかという点である。ストウがドメスティシティに参入しようとする解放民女性から「自由労働」を切り離してしまい、それが自由労働・人種・ジェンダーを接続できない限界点であったとすれば、はたして自由労働思想の「実験場」にいたタウンは、日記というテキストにその問題をどのように書き記したのだろうか。

ペンシルヴェニア州出身の自称「奴隷制廃止論者」であるタウンは、南北戦争が勃発した頃ロードアイランド州ニューポートに滞在していた<sup>31</sup>。彼女は女性共済組合に参加し、従軍兵士のために裁縫に携わるといったささやかな「戦時協力」をしていたが、「ロードアイランド州軍のため」ではなく、「生まれ故郷の助けとなりたい」と切実に考えており、自身のホメオパシーにかんする知識を役立てるべく看護の仕事に就きたいと強く希望していた。ニューポートでの現状に「ちっとも満足できない」日々を過ごすうちに、まもなく彼女はフィラデルフィアのポートロイヤル救済委員会より委任状を受け取ることによって、その後の彼女の人生を方向づける大きな転換期を迎えることになる。つまり、解放民の教師としてシー諸島地域への正式な派遣が決まったのだ (May 15, 1861, PSP)。このときタウンは36歳の独身であった。女性にとって世間の中傷を受けずに公的領域へと参入することがきわめて困難だった社会思潮において、彼女はヴィクトリア時代に求められた理想の白人女性像——「家庭の主婦」という生き方——から、いくなれば堂々と逸脱する好機を得たのである。

ポートロイヤル島をはじめとするシー諸島地域が北部連邦軍によって占領されたのは、南北戦争の開戦よりおよそ半年後の1861年11月（タウンが派遣される約5か月前）であった。白人農園主たちが逃げ去ったあと、同地域には1万人におよぶ解放民たちと綿花プランテーションが残され、そのうえ、彼らは風土病や北軍兵士らによる暴力行為にさらされた状態にあった。この状況に対処すべく、財務長官サーモン・チェイスはただちにマサチューセッツ州慈善活動管理局の局長であったエドワード・ピアスをこの地の監督にあたらせた。ピアスの呼びかけにより医者や教師、農園監視者らが派遣されることとなり<sup>32</sup>、そのうちのひとりがローラ・タウンだった。

セントヘレナ島に先んじてポートロイヤル島ビューフォートに到着したタウンは、奴隷解放後の南部社会を目の当たりにし、次のように記述している。

町を歩くことは苦痛だった。荒らされて廃墟のようになってしまっているからだけではない。それ以上に、兵士たちが無為にぶらついて娯楽と暇つぶしのために気違いのようになっているからだ。彼らは刺激を求めて残忍な行為に走ってしまうのだ。[…]

兵士のほかは、通りはきわめて奇異なニグロの子どもたちであふれかえっている——汚れて、みすぼらしい。けれど、知性はアイルランド人と変わらないと思う。子どもたちの話し方はとても理解できるものとはいえないが (April 17, 1862)<sup>33</sup>。

路上に横行する北軍兵士の暴力や黒人の子どもたちの有りようは、同地を訪れたことのある他の白人女性の筆致と比べても、けっして誇張した表現ではない<sup>34</sup>。日記の同日ページに記されているように、タウンはある解放民学校を訪問したさいに「とても教養のなさそうな女性たち」が「たいへん理知的に答えて」いたことも目撃する。即座に彼らにたいする「教育制度の大きな欠如」を看破したタウンは、南部にて黒人教育に奉仕する決意をあらたに固め、診療行為等の活動を通して彼らの置かれた状況を把握し、やがて黒人たちを「われわれの同胞」(傍点原文)とみなすようになっていく (April 17, 1862; April 18, 1862; April 27, 1862; May 13, 1862, PSP)。

ところが、最初にタウンに課せられた仕事は解放民教育ではなく、ポープ・プランテーション内に所在するエドワード・ピアス邸の「家庭管理」とピアスの雑務処理、およびフィラデルフィアの救済委員会から送付されてくる衣料品・食糧品等を解放民へ配給することであった(「配給」といっても、実際には解放民のために設置された「ストア」において、寄付された物品を彼らに「売りつける」ことであった)。タウンは「ハウスキーパー」を担当せざるえない状況について、フィラデルフィアの家族に宛てた手紙のなかで嘆きつつも(「わたしが——考えてもみて!——わたしが家庭を管理するなんて!」)、このピアス邸に集う「大家族」とストアを切り盛りした (April 21, 1862, PSP)。

この解放民のためのストアとは、アメリカ解放民調査委員会の助言により各地に設置されたもので、エドワード・フィルブリックのような北部出身の経営者らにとっては、黒人の購買力を教化するためにも有益な場であった。多くの自由労働主義者は、自身の生活必需品を購入するという行為によって黒人の「依存心」が正され、かつ自立心が涵養されると確信していたため、その障害となりうる黒人への「施し」

を強く否定した。解放民は農場で食糧につながるトウモロコシ栽培が禁止されているなど自給自足の手段を絶たれている場合が多く、生活のためにはストアに殺到するしかなかった<sup>35</sup>。タウンは自分の担当するストアに届けられる物品の価格が、「フィラデルフィアの小売店よりも場合によってはかなり高い」ので「気に入らない」のだが、それでも「朝早くから晩まで、ここでは買いものをするニグロたちが群がっている」ため、黒人たちにたいして何とか善処しようとする (April 27, 1862, PSP)。また、物品の「開封や梱包はずいぶんとうまくなった」ものの、タウンはなおも「ものを売って金銭を受け取るのは心が痛む」と打ち明け、ある解放民女性とのやりとりを次のように記述している。

ある女性がごっそりと衣類を購入するのをみて、わたしは「お金を全部使ってしまったのはだめよ」と声をかけた。「これはすべて子どもたちのです」と、その女性は答えた。

「自分には何ひとつも買ってはいねえです。わたしは自分のお金を衣類に費やしたいんで——子どもたちは裸で、まったくといっていいほどの裸で——ぼろをまとっているんです。糖蜜と豚肉はまだ配達区に届いていない。届けられても、この人びとには購入できる金銭はないだろう (May 13, 1862, PSP)。

タウンが自由労働に拘泥せず、むしろそれに懐疑的であったのは、自由労働主義者たちの存在によってその実践と内実を知悉していたからであり、また、カート・ウルフが述べているように、おそらく一般的な北部白人女性には持ちえなかった黒人への共感、とくに黒人女性の境遇にたいする理解があったことによるだろう<sup>36</sup>。理念よりも現実を直視したタウンは、ストウが断ち切ってしまった「黒人女性と家事労働」という限界点に立ったとき、けっして解放民女性を切り捨てることはしなかった。彼女は自由労働と家庭をイデオロギー的に結びつけるのではなく、奴隷解放後の南部社会を生きる黒人女性の現実に対応するために（エリナを「臨時で」、料理女のリーナを月給5ドルで、掃除や使い走りをする黒人少女を2ドルで雇い入れていくように）、積極的に解放民女性の家内賃金労働を受け入れる。連邦政府による解放奴隷への手当がまったく保証されず、黒人たちが職を求めてはその報酬を白人雇用主に依存しなくてはならないという、南部社会に自由（賃金）労働がもたらされたがゆえの問題に直面していたことをタウンは理解していたのである。しかも、ストウのプランテーションで雇われたミンナのような女性労働者ではなく、タウンが「農園労働に不向き」とおぼしい黒人女性の雇用を試みている点は、両者の相違

を際立たせていよう (April 21, 1862; April 27, 1862; February 7, 1864, PSP)。

こうしてエリナは「洗濯婦かつ小間使い」として週給50セントの待遇を受けることになり、タウン自身は教師の仕事に就くことのできない焦燥感を抱きながらも、「南部の使用人やら、ひょっこり居座る者たちやらと、わたしの管理能力が半分も効かないような状態で」ピアス邸のハウスキーパーという役割をはたしていくのであった。タウンとしては、エリナへの報酬の少なさに納得できないようであるが(「もっと支払ってあげたいが、やめておこう。そうしてしまうと、農園労働者や他の者たちが不平をいうだろう…」)、南北戦争期という混沌の時代に、黒人女性が料理人や洗濯婦として賃金を得られる機会のごく限られたことであった (April 27, 1862, PSP)<sup>37</sup>。

タウンという北部人女性のテキストは、彼女が当時としては稀有なほどに典型的な黒人観から解放されていたことを示しているが、それはタウンが、白人女性を束縛するドメスティック・イデオロギーからの自由を求めていたことに由来すると思われる。これを確認するには、自由労働イデオロギーが南部社会にもたらした最大の矛盾点のひとつ、すなわち解放民女性に着眼する必要がある。このイデオロギーの「不自由」や「女性と賃金労働問題」についてはすでに考察を試みたとおりであるが、じつは黒人女性という存在そのものにも別の問題がはらんでいたのである。

北部共和党的な自由労働思想の支持者たちは、かつての奴隷市場に代わる自由競争の市場で、解放奴隷たちに自身の労働力を賃金と交換する機会を与え、新しい労働習慣と経済的自立をうながすことを企図していた。その一方で、北部人たちは経済的自立だけでなく家庭生活の確立——これこそ、自由労働思想が謳う「中流階級層への参入」に必須とされた事項であった——をも求める黒人の欲求が、その実験をくつがえすのではないかという危惧も抱いていた。なぜなら、家族関係の安定に絶えず脅威を与えてきた奴隷制から黒人が解放されれば、家族および黒人コミュニティの団結は堅固なものとなり、さらに解放民女性は妻ないし母としての役割をあらたに担っていくことが期待され、黒人女性が賃金労働から「離脱」という事態が危ぶまれたからであった。むろん、圧倒的多数の解放民女性は貧困のために農園労働者として働き続けたが、実際にそのような「離脱」の状況が一部の黒人層にみられた。黒人たちが奴隷制によらずに勤勉に労働することにより、農業生産を向上させるという「自由労働の実験」の成功をもくろんでいた人びとにとって、労働力としての解放民は男女を問わず必要であったから、黒人女性が家庭内へ「逃げ込む」ことは想定されていなかったのである<sup>38</sup>。つまり、「男女の領域」を規定する中

流階級文化に参入する可能性は、黒人女性の場合、あらかじめ排除されていたとい  
ってよい。聖域としての家庭への黒人女性の参入を拒絶したいという白人の意思は、  
北部から来た農園主らのあからさまな中傷文のみならず、たとえば、エリザベス・  
ボテュームのような女性教師によっても穏やかに示唆されているが<sup>39</sup>、興味深いこ  
とに、タウンのテキストに黒人女性と家庭が結びついて登場するのは、それらとは  
まったく異なるかたちにおいてなのである。

「集会には投票権をもつ男性だけが参加できます」と、ハン氏は答えた。すると、〔黒  
人男性の〕ディーマスは即座にこう告げたのである。「女どもは家で草でも刈ってる」  
と。つまり、トウモロコシ畑と綿花畑を耕せ——畑の草刈りをせよ、というのだ（May  
12, 1867, PSP）〔傍点引用者〕。

このように私的領域としての家庭が黒人女性と結びつくのは、男性が誇示する公的  
領域の属性（この場合は、黒人男性が獲得したばかりの投票権という公的権利を振  
りかざすこと）が立ち現れるときのみであり、それは人種の境界を示す表現ではな  
く、女性を劣性とみなすさいのジェンダー的なレトリックとなっている。タウンに  
とって「家庭」とは、人種にかかわらず女性を私的空間に押しとどめる囲いのこと  
であって、それ以上のことを意味しない。当時の自由労働主義者らが懸念したよう  
に、黒人女性が中流階級の価値観を追従しているといった人種的・階級的な誹謗は、  
タウンのテキストには意図されていないのである。

ローラ・タウンは「黒人たちの綿花生産が鞭なしでも可能であることを示そうと」  
腐心する自由労働主義者たちを、皮肉を込めて「紳士たち」と呼称し、そのやり方  
が「ただ強制のかたちを変えたにすぎない」ことを自身の日記において強調する  
（May 19, 1862, PSP）。黒人をプランテーション労働に捕縛する自由労働イデオロ  
ギーや労働契約について、彼女がその本質を洞見しえたのは、ピアス邸の「家庭の  
管理者」として解放民たちと共に暮らした経験の所産によるものであった。そして、  
自由労働に懐疑的でありながら、黒人女性を家内賃金労働者として家庭空間に雇い  
入れるという矛盾した態度は、セントヘレナ島の現実を重視する彼女の行動力およ  
び共感の力の表出であると捉えることができる。そこにこそ、自由労働思想を支持  
したストウが逆に到達しえなかった黒人女性によるドメスティシティへの関与、つ  
まり、黒人女性を排除することなく、「自由労働」と「ドメスティシティ」を結びつ  
ける構想の可能性が認識されるのである。

## V

ローラ・タウンはピアス邸の「ハウスキーパー」を辞したのち、教師として働くようになってからも、自宅に黒人の家事使用人を雇い入れて彼女たちに賃金を支払い、また、エレン・マリーと共同運営するペンスクールでは、そこで働く女性教師たちにたいして俸給を支払っていた。だが、彼女自身は自分の給与を受け取ることにはためらいを示していた。

いまやどこに行っても<sup>ボランティア</sup>篤志家としての榮譽を受けているのに、給料をこっそりと受け取るなんて、あまりにも格好が付きません。たいへん悩んでいます。給料なしで暮らせていたら、もちろんそれが最良な方法ですし、喜ばしいことでしょう。だけど、わたしにそれができるのでしょうか… (September 1, 1865, PSP)。

タウンはつねに学校運営の資金不足に悩まされていたが、この家族宛ての書簡の日付からさらに10年以上の年月をへた別の書簡にて、タウンは俸給を受け取らずに教育活動に従事していることを明かしている<sup>40</sup>。俸給を受け取ってしまうと「篤志家」としてのタウンは否定され、それを労働の対価として認めてしまうことになる。そこで資金不足に直面した彼女は、自分の給与をほかの支払いに充てた。ピアス邸のハウスキーパー時代、自由労働システムに放り込まれた黒人女性という現実的問題を直視し、彼女たちを賃金労働者として家庭内に参入させたように、またもや、資金不足という現実がタウンに俸給を受け取らせないという圧力となった。つまり、その生涯を通して否定し続けた自由労働に自らは縛られることなく、ローラ・タウンは教育者として——いわば、<sup>ボランティア</sup>自由意志による奉仕者として——その天職をまっとうしたのである。

## 註

<sup>1</sup> 「ポートロイヤルの実験」とは、1861年の北部連邦軍によるシー諸島地域占領後、黒人を「自由人」として教育し、放棄されたプランテーションで「自由労働」を実践させるために組まれた連邦政府のプロジェクトを総称する。これはウィリー・ローズの研究書のタイトルにみられるように、のちの南部再建の「予行練習」と位置づけられた。Willie Lee Rose, *Rehearsal for Reconstruction: The Port Royal Experiment* (Oxford: Oxford University Press, 1964).

<sup>2</sup> Laura M. Towne, April 28, 1862, Folder 337-341, Volume 3, Penn School

Papers, Southern Historical Collection, University of North Carolina, Chapel Hill. この史料によるローラ・タウンの日記および書簡からの引用は、ここより本文の括弧内に日付とともに PSP と略す。

<sup>3</sup> “Collector’s Office, New York Custom House to Laura M. Towne,” April 3, 1862, PSP.

<sup>4</sup> 北部出身の白人女性たちは、南部における教育活動の奉仕という点で高く評価される一方、北部的・資本主義的価値観を解放民に押しつける「北部の女教師」(Yankee schoolmarm) としてもステレオタイプ化されている。以下を参照されたい。Ronald E. Butchart, *Schooling the Freed People: Teaching, Learning, and the Struggle for Black Freedom, 1861-1876* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2010); Sarah Dalmas Jonsberg, “Yankee Schoolmarms in the South: Models or Monsters?,” *The English Journal* 91, No. 4 (2002): 75-81; Sandra E. Small, “The Yankee Schoolmarm in the Freedman’s Schools: An Analysis of Attitudes,” *The Journal of Southern History* 45, No. 3 (1979): 381-402.

<sup>5</sup> Rupert Sargent Holland, ed., *Letters and Diary of Laura M. Towne: Written from the Sea Islands of South Carolina, 1862-1884* (Cambridge: Riverside Press, 1912), 21-23.

<sup>6</sup> Eric Foner, *Free Soil, Free Labor, Free Men: The Ideology of the Republican Party Before the Civil War*, with a New Introductory Essay (Oxford: Oxford University Press, 1995), ix-xv; Foner, *Politics and Ideology in the Age of The Civil War* (Oxford: Oxford University Press, 1980), 100-101.

<sup>7</sup> 「ホワイトネス研究」の視点からみると、「自由労働」とは「雇われ労働者」の白人が賃金に依存すること（「白人奴隷」とみなされること）への不安と、資本主義的な労働規範に従わざるをえない苦境に立たされたときに自らの隷属性を否定するため、「黒人奴隷」という対蹠的存在を置くことによって利用された用語であった。デイヴィッド・ローディガーは、とくに1830年代の北部白人労働者の間で「賃金労働」よりも「自由労働」という表現が頻用されたことを論証している。David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*, Revised Edition (London: Verso, 1999 [1991]), 13-14, 86-87. アンテベラム期アメリカにおける自由労働観については、以下を参照のこと。Jonathan A. Glickstein, *Concepts of Free Labor in Antebellum America* (New Haven: Yale University Press, 1991).

<sup>8</sup> 革命期以降、北部ではそれまで広く存在していた徒弟や使用人等の「不自由労働」に従事する者は、減少傾向にあった。1850年までには都市部における賃金労働者数が奴隷人口を上まわり、さらに1860年の頃には自営者数を超えていた。Elizabeth Blackmar, *Manhattan for Rent, 1785-1850* (Ithaca: Cornell University Press, 1989), 125; Foner, *Free Soil*, xv-xvi; Foner, *Politics and Ideology*, 74.

<sup>9</sup> Foner, *Free Soil*, 29-39; Rose, 199-216; Lawrence N. Powell, *New Masters: Northern Planters During the Civil War and Reconstruction* (New York: Fordham University Press, 1998), 49; 辻内鏡人『アメリカの奴隷制と自由主義』（東京大学出版, 1997）, 91-92.

<sup>10</sup> Carol Faulkner, *Women’s Radical Reconstruction: The Freedmen’s Aid*

*Movement* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2004), 3; Eric Foner, *Reconstruction: America's Unfinished Revolution, 1863-1877* (New York: Harper & Row, 1988), 156.

<sup>11</sup> たとえば、ダグラスの以下の著作を参照のこと。Frederick Douglass, *My Bondage and My Freedom* (New York: Penguin Books, 2003 [1855]).

<sup>12</sup> Powell, 52; Julie Saville, *The Work of Reconstruction: From Slave to Wage Laborer in South Carolina, 1860-1870* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 91-92.

<sup>13</sup> Edward S. Philbrick, "December 10, 1862," Elizabeth Ware Pearson, ed., *Letters from Port Royal: Written at the Time of the Civil War* (Boston: W. B. Clarke Company, 1906), 119.

<sup>14</sup> フィルブリックは年間3,000ドルの資金を黒人学校に援助し、政府委託によるプランテーション内に設置された非営利の「ストア」にさまざまな家庭用品や雑貨を提供していたが、彼のこのような「慈善」行為は黒人たちの購買力を高めるための教育投資であった。学校教育をつうじて中流階級的価値観を学んだ黒人たちにとって、衣類や食糧などの生活必需品はもはや奴隷主から支給されるものではなく、自由労働主体となった自身が給金によって購入すべきものであり、この金銭による購入行為そのものが彼らに与えられた「自由」のひとつと考えられたのである。フィルブリックは、黒人の生活必需品への欲求が増大すればますます彼らは「勤勉に」労働すると主張する一方、労働の現場における賃金の値上げについてはきわめて慎重であった。労働のさしたる努力なしに給料を上げてしまえば、黒人たちの「勤勉さ」の涵養を妨げるというフィルブリックの確固たる自由労働観のあらわれであろう。Pearson, viii, 265-266; Rose, 297-313.

<sup>15</sup> 知人への書簡のなかで、フィルブリックは「400万人の黒肌らを文明化する」には「博愛の精神あふれる慈善家たちの手」のみに委ねるのではなく、黒人に自由労働を適応させることが必要であると説いている。彼は「もし経済的に成功すれば、自由労働が完結したシステムであること、また、黒人たちが奴隷主の手から離れるやいなや、有能な労働階級となることが証明されるでしょう」と記述し、「黒人労働」が「利益を生む」(傍点原文)という点を強調している。Philbrick, "Boston, September 24, 1865," Pearson, 220-221.

<sup>16</sup> Philbrick, "Boston, July 8, 1864," Pearson, 275.

<sup>17</sup> Amy Dru Stanley, *From Bondage to Contract: Wage Labor, Marriage, and the Market in the Age of Slave Emancipation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), 138-174. 現実には、解放民労働者は事実上の強制労働が課せられる契約を回避する傾向にあった。1865年に設立された解放民局は、解放民への食糧給付や労働契約の仲介等の再建行政の中心的役割を担ったが、依然として黒人の労働契約は進展しなかった。Foner, *Politics and Ideology*, 100-103; 辻内, 232-237.

<sup>18</sup> 19世紀アメリカの「ドメスティシティ」概念について、本稿はおもにブラウンとカプランに依拠している。Gillian Brown, *Domestic Individualism: Imagining Self in Nineteenth-Century America* (Berkeley: University of California Press, 1990) 1-10; Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire: In the Making of U. S. Culture* (Cambridge: Harvard University Press, 2002), 1-22.

19 一般的に女性の賃金労働は否定され、「女の賃金」(woman's wage) という侮蔑的表現が使われた。Blackmar, 112-121; Alice Kessler-Harris, *A Woman's Wage: Historical Meanings and Social Consequence* (Lexington: The University Press of Kentucky, 1990), 36-39; Kessler-Harris, *Out to Work: A History of Wage-Earning Women in the United States*, 20th Anniversary Edition (Oxford: Oxford University Press, 2003), 32-34.

20 Brown, 13-38; Walter Benn Michaels, *The Gold Standard and the Logic of Naturalism: American Literature at the Turn of the Century* (Berkeley: University of California Press, 1987), 101-112.

21 Rachel Naomi Klein, "Harriet Beecher Stowe and the Domestication of Free Labor Ideology," *Legacy* 18, No. 2 (2001): 137-140; Michael D. Pierson, *Free Hearts and Free Homes: Gender and American Antislavery Politics* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2003), 74-91.

22 Catherine E. Beecher and Harriet Beecher Stowe, *The American Woman's Home: Or, Principles of Domestic Science; Being a Guide to the Formation and Maintenance of Economical, Healthful, Beautiful, and Christian Homes* (Hartford: Harriet Beecher Stowe Center, 1975 [1869]), 13.

23 Harriet Beecher Stowe, *The Chimney-Corner* (Boston: Ticknor and Fields, 1863), 125-126.

24 Kathryn Kish Sklar, *Catherine Beecher: A Study in American Domesticity* (New Haven: Yale University Press, 1973), 180-182.

25 オレンジ農園を購入する以前には、ストウ家はその近隣に綿花農園を一時的に所有していた。そこでの自由労働の実践において、一家は勤勉かつ敬虔な黒人労働者たちに恵まれたものの、綿花がもたらすであろう「黄金の未来」は大群の「ヨトウムシ」によって台なしにされてしまう。奴隷労働の癒しがたい南部社会において、ストウの自由労働イデオロギーの「実験」はあまりにもそっけなく、そして楽観的なことばを添えて終了する。「わたしたちはセントジョーンズ川の反対側にオレンジ農園を購入して、そして、二度と綿花栽培はしないと誓いました」。Stowe, "Our Florida Plantation," *Atlantic Monthly* 43, Issue 259 (1879): 641-649. この逸話は南部に導入された自由労働イデオロギーの完全なる失敗談として、じつに興味深い事例を提供していないだろうか。ストウ家のフロリダでのプランテーション生活については、ストウの「フロリダ農園」の記事のほか、ヘドリックによる伝記およびパウエルを参照した。Joan D. Hedrick, *Harriet Beecher Stowe: A Life* (New York: Oxford University Press, 1994), 328-330; Powell, 17-18.

26 Harriet Beecher Stowe, *Palmetto Leaves*, with Introductions by Mary B. Graff and Edith Cowles (Gainesville: University of Florida, 1990 [1873]), 298-321.

27 Klein, 147.

28 家事労働にかんするストウの発展的思想については、ドロレス・ハイデンを参照のこと。Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution: A History of Feminist Designs for American Homes, Neighborhoods, and Cities* (Cambridge: MIT Press, 1981), 55-63.

<sup>29</sup> 教育者としてのタウンを扱った研究書や論文は、以下を参照のこと。また、タウン自身による回想的エッセイも参照されたい。Elizabeth Jacoway, *Yankee Missionaries in the South: The Penn School Experiment* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980), 28-46; Gerald Robbins, “Laura Towne: White Pioneer in Negro Education, 1862-1901,” *Journal of Education* 143 (1961): 40-54; Laura Matilda Towne, “Pioneer Work on the Sea Islands: Article about Penn School, 1862-1901,” *Standing Before Us: Unitarian Universalist Women and Social Reform, 1776-1936*, Dorothy May Emerson, et al., eds. (Boston: Skinner House Books, 2000), 360-364.

<sup>30</sup> Jacqueline Jones, “Women Who Were More Than Men: Sex and Status in Freedmen’s Teaching,” *History of Education Quarterly* 19, No. 1 (1979): 49.

<sup>31</sup> Laura M. Towne, “Company of Port Royalists which sailed from New York of the Steamer Oriental, Wed. Apr. 9, 1862,” PSP. 1825年、ペンシルヴェニア州ピッツバーグに生まれたローラ・タウンは、一家とともに一時期ボストンに移住した。その裕福な家庭環境のなかでローラは「ボストンの教育」を受け（ボストンは、いわばタウン家が奴隷制廃止問題という「洗礼」を施された最初の土地であった）、1840年に一家はふたたび故郷の州に戻った。このときの移住先はフィラデルフィアであり、この土地でローラは奴隷制廃止論者となる二度目の（そして決定的な）洗礼を受けることとなった。ユニテリアン派の信徒であったタウン家の面々のなかでも、若年のローラはウィリアム・ヘンリー・ファーネス牧師（ウィリアム・ロイド・ギャリソンやルクレティア・モットなど、当時有数の奴隷制廃止論者たちと交友関係にあった人物）が熱狂的に説く奴隷制問題に深く感化された。また、奴隷制廃止論への熱意が昂揚する一方で、タウンはホメオパシーにも熱心な取り組みを見せ、1850年代後半、彼女はペンシルヴェニア女子医科大のコンスタンティン・ヘーリング博士（フィラデルフィア地域にある各ホメオパシー診療所の創設者）のもとで医学を学んだ。この時期に複数の「慈善学校」で教師も務めており、このような教師の経験や医科大での治療にかんする知識が、のちにセントヘレナ島での仕事に大いに役立つことになる。Holland, x-xi; Willie Lee Rose, “Towne, Laura Matilda,” *Notable American Women, 1607-1950: A Biographical Dictionary*, Volume 3, Edward T. James, et al., eds. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1971), 462-473; Kurt J. Wolf, “Laura M. Towne and the Freed People of South Carolina, 1862-1901,” *South Carolina Historical Magazine* 98, No. 4 (1997): 378-379.

<sup>32</sup> Ira Berlin, et al. eds., *The Wartime Genesis of Free Labor: The Lower South* [Freedom: A Documentary History of Emancipation, 1861-1867, Series 1, Volume 3] (Cambridge: Cambridge University Press), 92-93; Stanley, 128-129.

<sup>33</sup> 引用文にある「知性はアイルランド人と変わらない」（“the same as so many Irish in intelligence”）という表現は、南部に到着したばかりの頃のタウンが、やはり当時の「一般的」な人種観の持ち主だったことを明示する。ホルランドの編集過程では「ほかの子どもたちと変わらない」（“the same as other children in intelligence”）との修正が加えられたが、最終的には原文のまま掲載された。Holland, 5-6.

<sup>34</sup> たとえば、ボストン出身の女性教師エリザベス・ボテュームは、1864年、ビューフォートに上陸したときに得た印象を次のように記している。「ニグロ、ニグロ、ニグロ。彼らはミツバチのように群がってうろついていました。座り込む者、立ち上がる者、手足を伸ばして仰向けに寝そべる者。あらゆる戸口のステップ、郵便箱、樽はニグロだらけ […]。ビューフォートの町は元奴隷であふれんばかりでした」。この記述は南北戦争期・再建期の研究者らによってしばしば引用され、北部人女性の典型的な黒人観を示すものとなっている Elizabeth Hyde Botume, *First Days Amongst The Contrabands* (Boston: Lee and Shepard Publishers, 1893), 31-32.

<sup>35</sup> Faulkner, 12. また、『シャーロット・フォートン・グリムケの日記』で著名な黒人女性ダイアリストであったフォートンは、一時期ペンスクールで教師として働いていた。彼女もプランテーション内のストアがつねに混雑していたことを記述している。Charlotte Forten, “Life on the Sea Island, Part I,” *Atlantic Monthly* 13 (1864): 592.

<sup>36</sup> Wolf, 384, 396.

<sup>37</sup> Jacqueline Jones, *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work and the Family from Slavery to the Present* (New York: Vintage Books, 1995 [1985]), 50.

<sup>38</sup> *Ibid.*, 58-59. 南北戦争期・再建期における解放民女性の家庭形成については、以下も参照されたい。Laura F. Edwards, *Gendered Strife and Confusion: The Political Culture of Reconstruction* (Urbana: University of Illinois Press, 1997); Leslie A. Schwalm, *A Hard Fight for We: Women’s Transition from Slavery to Freedom in South Carolina* (Urbana: University of Illinois Press, 1997); Marli F. Weiner, *Mistress and Slaves: Plantation Women in South Carolina, 1830-80* (Urbana: University of Illinois Press, 1998); LeeAnn Whites, *Gender Matters: Civil War, Reconstruction, and the Making of the New South* (New York: Palgrave Macmillan, 2005).

<sup>39</sup> 家庭にとどまる解放民女性は「怠惰」とみなされ、農園労働よりも家事労働を好む黒人女性は「白人中流階級の価値観への順応」と捉えられることがあった。Jones, *Labor of Love*, 59; Leon F. Litwack, *Been in the Storm So Long: The Aftermath of Slavery* (New York: Vintage Books, 1979), 245. また、女性教師ボテュームは、綿花畑から帰宅する「鋤を肩にした」解放民女性が「赤ん坊を背中に巻きつけて」いる光景に何度も出くわしている。スタンリーはこの記述を「賃金労働とドメスティシティが柔らかに融和した、穏やかな場面」と呼ぶ。黒人女性による家庭内での育児が否定され、本来ドメスティックであるはずの育児という労働が家庭外の農園労働と結びつくさまを「柔らかに」表現したボテュームの記述は、黒人女性は中流階級の価値観に従ってはいらないとする不寛容が示されていないか。Botume, 53; Stanley, 188.

<sup>40</sup> 「エレンとわたしは給料を受け取っていません。だから5名の教師に〔給料を〕支払うだけです」(“Frogmore, Sept. 18, 1877,” PSP)。